

創刊号熊本市後藤是山記念館だより

たん せい 居

記念館内にある淡成居



は、北千反町にあって家に13年ほど住んでいました。この家は、時習館2代目教授・薮孤山(やぶこざん)の旧居

の師であった徳富蘇峰で「君子の交わりは淡々として水のごとし」という意味があります。

是山はこの水前寺に移り住む前

「淡成居」って、どこ存じですか？

「淡成居」とは、後藤是山が住んでいた旧居のことです。後藤是山記念館には、この旧居と庭園がそのままのこされ、茶の間に切られた囲炉裏や床の間、縁側とガラス戸など、是山のくらしぶりをしのばせます。

是山は、昭和2(1927)年から亡くなる昭和61(1986)年までの60年間をここで過ごしました。

「淡成居」と命名したのは、生涯

で、この家が解かれることになり、この地に新築し移りました。その際、薮孤山旧居の床の間など、その一部を移築しています。

ここに移った頃の「淡成居」の風景は、周りには何もなくて、ただ、荒涼たる託麻原の一角で、特に公園の西北部は、全く一軒の住宅もなく、栗畑あり、西瓜畑あり、

野菜畑であってわたくしが文字通りの草分けであった」と述べています。昭和4年7月には水前寺公園の隣に熊本動物園も開園し、旧居までゾウなど猛獣たちの声も聞こえていたそうです。

「淡成居」の庭には、徳富蘇峰から贈られた公孫樹の木や徳富蘆花の没後、粕谷の蘆花園からは山が苗をもらってきた満天星(ドウダンツツジ)やゆかりの栗の木のほか、蘇峰の詩碑、是山の筆塚が残されています。

後藤是山記念館だより
「淡成居」を創刊しました

後藤是山といえば自ら「生涯一記者」として99歳の人生を生きた人です。

熊本の近代文化の発展と向上に大きく貢献し、昭和26(1951)年に熊本県近代文化功労者、昭和54(1979)年には俳人の中村汀女さんとともに熊本市名誉市民となりました。

後藤是山記念館は、是山が集めた膨大な資料とともに偉大な功績を永く将来へ伝えるため、平成8(1996)年に建てられたものです。

その是山の生涯にわたる活動や記念館のことなど、たくさんの方にお伝えするため『後藤是山記念館だより淡成居』を発行することにしました。創刊日は是山の誕生日である6月8日です。今後は季刊誌として発行してまいります。

後藤是山入門(その1)



生い立ちから九日退社まで

後藤是山(ごとうぜざん)は明治、大正、昭和と生きた新聞記者です。新聞が政党の機関紙としての性格が強かった時代に新聞での文化、文芸欄の重要性を訴え、その刷新に努めました。中央の文化人とも幅広く交流し、自らも歌人、俳人として、また郷土史家としても活躍し、近代熊本文化の発展に多くの功績を残しています。今回は是山入門(その1)として99歳の生涯のうち、是山の生い立ちから九州日日新聞社を辞めるまでをたどってみたいと思います。

◆生い立ち

小学校に通うのを嫌がっていた是山

是山は明治19(1886)年6月8日に大分県の久住町(現在は竹田市)に生まれました。久住は江戸時代肥後藩の飛び地領で、

当時においてご城下といえは熊本城下という親しみがのこっていました。

本名は後藤祐太郎(ゆうたろう)。父は満太郎、母はリク(是山が3歳の時に死去)といいます。

幼少時代の是山はおとなしく気難しい男児でした。久住尋常小学校に入学したところ、小学校に通うのを嫌がるため、一番上の姉・智加が学校までついていき、授業中もずっと横に座っていた、そんなエピソードがあります。

明治33年、大分県立竹田中学校に入学すると、詩人の筑紫久嶺



大分県立竹田中学校時代の是山中央

(ちくしきゆうれい)らとともに文芸活動を始めます。是山はこのころ短歌を詠み、萬朝報(よろずちようほう。当時あった東京の新聞社)の懸賞短歌によく入賞していました。

竹田中学校4年の時、是山の人生にとって重要な出来事があります。校庭で日露戦争の旅順港閉塞作戦で戦死した地元出身の広瀬武夫中佐の追悼法会が行われた時のことです。九州日日新聞の主筆であった小早川秀雄が弔辞を読みます。是山は小早川の新聞記者としての堂々たる姿に感動し、「新聞記者になろう」と決意したのでした。

◆九日入社と

国民新聞社での修行

竹田中学校を卒業した1年後、是山は早稲田大学に入学しますが、義母マサ(父の後妻)の看病のため久住へやむなく呼び返されてしまいます。しかし新聞記者になる夢は捨てきれず、大学には復学できまらなかったが、父を説得し九州日日新聞社に入社することになります。是山は23歳です。「是山」という号も新聞記者になってつけ

たものです。

当時の九州日日新聞社(九日)は熊本市の神通町(びぶれす広場辺り)にあり、社長はのちに熊本市長となる山田珠一でした。当時の新聞社は政党色が強く、社説、評論、ニュースも政党本位に編集されており、九日も例外ではありませんでした。是山はどうしてもそれに違和感を感じずにはおれませんでした。次第に九日を辞め東京の新聞社で記者の勉強をしたいという思いが募っていきます。その思いを知った山田社長は、記者修行のためならばと上京させることにしたのです。修行先は徳富蘇峰の『国民新聞社』でした。明治44年1月、是山25歳のときです。

是山の生涯にとって『国民新聞社』での修行は大きな意義を持ちます。徳富蘇峰はすぐに是山が政



記者時代の是山(一番下)

党記者向きではなく、文芸面で大きな資質を持っていることを見抜きます。それによって国民新聞社での活躍の場を見出し、是山は、徳富蘆花、与謝野晶子、高濱虚子など多くの著名人たちと交流を深めていきます。このことが九日復社後の是山の仕事の大きな礎となっていました。

◆九日へ復社

文化・文芸欄の拡充と連載

是山は、国民新聞社での1年間の記者修行を終えると九日で文化・文芸欄の充実に努めます。当時は新聞の文化、文芸欄は閑文字（かんもんじ）と言われていた時代です。やはり九日に帰ってきて、紙面の余りを埋める程度にしか考えてもらえませんでした。それでも是山は少しずつ、新聞を通して地方文化の向上に向け切り開いていきました。

大正2年1月には古墳調査で来熊した宮内省御用掛の増田于信（ますだうしん）に同行し古墳の調査に出かけます。そして「古墳保護の必要」と題して九日に掲載し、古墳保護の重要性を訴えます。また同年神風連の勃発から終焉ま

で「肥後の勤王」として連載し好評を博します。そして、大正5年、6年には現在でも熊本本の郷土史研究に欠かせない『肥後國誌』の再編纂を行い郷土史研究の発展に寄与していきます。是山30歳のころです。

文芸欄の充実でも目を見張るものがありました。大正6年元旦を飾る九日の「懸賞文藝」の欄として、選者に、いわゆる旧派といわれる歌人・宇野東風に加え、歌人の与謝野晶子、俳人の高濱虚子らを迎え新聞一面をあて、文人画家の田中白東の梅花図なども添えてお正月らしいみやびな紙面にしています。当時の地方新聞では選者の選定も含め考えられなかったことでした。

◆多くの文化人との交流

なかでも与謝野寛・晶子夫妻との交流は有名

是山は生涯にわたって、田山花袋、島村抱月、松井須磨子、河東碧梧桐、堅山南風、旧友の朝倉文夫などといった中央の文化人らとも交流を深めています。中でも与謝野寛、晶子夫妻との交流は有名です。

晶子との直接の出会いには『国民新聞社』時代に始まりますが、寛との出会いは夫妻で初めて来熊した大正7年11月でした。32歳の是山は島原から海路三角に着いた夫妻を出迎えます。三角線で熊本駅へ行きますが、寛は目の前の迎えに来た男が是山だとは思わず「是山さんに早く会いたいね」と何度もいったそうです。晶子はたまりかね「是山さんに会っているじゃありませんか」と笑いながら答えたそうです。寛にとつて是山という号はよほど老翁のイメージであったようです。

二人は熊本に5日間滞在し、是山が熊本城、水前寺、阿蘇などを案内し、夜は歌会を催します。



これは昭和6年、与謝野夫妻の久住遊行の時別府にて（中央の3人、左から寛、晶子、是山）

是山はよほど楽しかったのでしょう。二人の離熊後、福岡まで追いかけて、とうとう別府まで同行しています。是山と夫妻との交流は生涯つづきました。

◆九日を退社

昭和5年、是山は九日の主筆となり、社を代表する一人になりました。しかし昭和9年に九日の監督であり、よき是山の理解者であった山田珠一が亡くなると、是山への風たりは強くなります。「あなたにはやめてもらわねばならん」当時の九日社長から言われると「わかりました。やめまっしょ」と是山は九日を辞めてしまいます。是山、48歳の時です。

是山は九日退社後は、昭和2年から続けていた俳句雑誌『かはがらし』の発行を続け、「生涯一記者」として月刊新聞『東火』や、戦後は旬刊新聞『西海時論』の発行を行い、熊本本の言論や文化の向上、発展に尽くしていきます。九日退社後、昭和61年、99歳で亡くなるまでについては次回お話しします。

〈参考文献〉

後藤是山遺文「そのころ」 後藤狷士編
是山小話 後藤狷士編
枯木山脈 橋元俊樹著

後藤是山記念館へ

行こう！

後藤是山記念館には旧居の淡成居と展示室があります。

展示室では常設展示と合わせ企画展を開催しています。

常設展示

是山の生涯や残した功績について触れ、理解を深めていただくために、是山にまつわる資料を多数展示しています。

九州日日新聞に連載した記事をもとに刊行した『肥後の勤王』、是山が再編纂した郷土史研究には欠



常設展示(上)と企画展示(下)

かせない『肥後國誌』、月刊新聞『東火』、旬刊新聞『西海時論』、長年にわたって発行し続けた俳句雑誌『かはがらし』(のちの『東火』)、直筆原稿などを多数展示しています。

企画展

『平安文学展』を開催中

NHK大河ドラマで「光る君へ」が放送されています。そこでは山と交流の深かった与謝野晶子が困難を乗り越えて現代語訳した『新訳「源氏物語」』をはじめ、当館が所蔵する『源氏物語』や『枕草子』など平安時代の文学作品関連資料を展示しています。

熊本市記念館探訪

徳富記念園 (中央区大江4丁目10-33)

是山にゆかりの深い徳富記念園。是山は徳富蘇峰の『国民新聞社』に記者留学し、そこで蘇峰に出会います。

蘇峰は是山にとって生涯の師であり、良き理解者でもありました。

是山は蘇峰のことを「あの人は大記者とか歴史家、事業家というような呼び方でくくることができない巨人」(「枯木山脈」より)と言っています。

また蘇峰の弟、徳富蘆花とも国民新聞社時代から交流が始まりました。蘆花に初めて会ったとき30分の約束が話が弾み数時間に及んだといいます。

徳富記念園には蘇峰が19歳の時、父と開いた「大江義塾」の跡(県指定史跡)も残されています。

ぜひ蘇峰、蘆花の息吹に触れてみてください。

(徳富記念園 096 - 362 - 0919)



徳富記念園内「大江義塾跡」

創刊号

熊本市後藤是山記念館だより
淡成居

発行日

令和6年(2024年)6月8日

編集・発行

熊本市後藤是山記念館
(熊本市文化財課所管)

〒860 - 0950

熊本市中央区水前寺2丁目6 - 10

電話・ファックス

096 - 382 - 4061

開館時間

午前9時30分～午後4時30分

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)

年末年始(12/29～1/3)

入館料 大人 200円

小人 100円

